

911.3
八
4

枕譜古今抄

拾遺十箇條
目之四

他諸在を抄巻之中

再校タヒスル十箇條序

蓮二二房

蓮二かくうけぬ今子拾遺十箇條の
むし祖翁の口誡をばかりて永く柳子庵の
秘稿とふとく祖翁の滅後二十年よりて
いそぐれ白馬持論をあらりて近く我らの
実評ととしあて遠く天下此実議を定規す
欺く者あれい程よ者も阿れい多し人おれ
抄り人いそぐあてさるを祖翁の標記めり

古今抄巻目

他諸在と抄巻之中

再校カヒスル十箇條序ヲ

蓮二之房



蓮二かくうけのりね今下拾遺十箇條の
むし祖翁の口誡をばかりて永く孤子庵の
秘稿とふとく祖翁の滅後二十年ありて
いそぐれ白馬寺十論をありて近く我らの
家評とてしあへ遠く天下に家評を宣観す
欺く者あれは疑ふ者も何れもあつたおれ
控へんはまきくあへるを祖翁の操新めり

古今抄巻五

此借の録明此法くるなる一と云れども
 貞享式之春秋と一字此處を物くると
 本辭を辭あるんはけり十箇條と在傳の耳と
 かむしけり一箇十知の秋文あるは例と一字此處
 ともありて百世にけりとの録あるはせけぬ
 け一冊と目錄と今の凡例を加して秋とけけおの
 中巻ととあるり例と祀義の口誡とおそれ例
 と先師の之と他ととあるんやんり人しけ序と
 照あふとよ

享保己酉二月中浚

十箇條目錄 並凡例

古法可有取捨事

▲杜鰐 ▲浮見竹 ▲柳 ▲櫻 ▲掌 ▲螢 ▲杜若

▲芭蕉 ▲蝸牛 ▲鶴鴒 此十只六象物ノ數量ナリ

異名ニ呼テハニ匹四匹免文レト今ノ作語ノ式目ニ座ニ匹ト
 定タリ古今ノ取捨トハ此謂ナリ右ハ十只ノ名目ヲ奉テ
 一万物ノ象ノ凡例ト成セリ但シ柳櫻等掌螢ノ四只ハ
 花鳥ノ段ニ秋文アリ異名異射ノ差別ハ首巻ノ凡例ニアリ

去嫌可有取捨事

△父母△男女 世四只ハ人倫ノ凡例ナリ △主△誰△身 世四只ハ二句ツク去キナリ

△独△媒 世五只ハ人倫ノ嚆ナリ人倫ト △僧△寺 世二只ハ定テ指合ヲ縁ルカラス

△二人倫 世非ス居ホニ非スト △親王皇女△天皇皇天女 世一在今式ニ指合ヲ縁ナリ

△帝御行△仙洞新院△鬼御 世十只ハ古式ニ色々ノ説アレハ人倫ニハ

△二句ツク去キナリ佛行△若菜△郭公△松虫△水仙 世七只ハ會立思ノ各目ニテ決レテ

△水鷄△日月△尾上 世二有下カラストナリ會意トハ

△二子ニ字ノ意ヲ會テ其各ヲ作ル 世二有下カラストナリ會意トハ △雪△雨 世二只ハ古式ニ

△故ナリ字ヲ造レル六書ノ一名ナリ 世二有下カラストナリ會意トハ △魚馬車△飯餅茶酒 世八只ハ

△阿比名類ナレハ 世二有下カラストナリ會意トハ △日用ノ物ナレハ二座ニ 世二有下カラストナリ會意トハ △松ノ子日△月ノ更科△花ノ野 世二有下カラストナリ會意トハ

△二句ツク有キナリ 世二有下カラストナリ會意トハ △鐘△鉄持△瓜木△妻 世二有下カラストナリ會意トハ

△歎△木△篠△依△四維△おまの扉の葛△水邊 世七只ハ古式ノ嫌物トナ

△山伏△山類夜分 世七只ハ古式ノ嫌物トナ △扇△御 世七只ハ古式ノ嫌物トナ

△△送△火△轉雷△眠△字△起△字△虫△石 世八只ハ古式ニ

△夜分ト定レ在今式ニ夜分 世八只ハ古式ニ △冠△鳥帽子△綿△木棉 世八只ハ古式ニ

△夕△立△雲△雨△笠△袴△袴 世五只ハ古式ニ附句ヲ

△婦△レ△總△テ△ハ 世五只ハ古式ニ附句ヲ △床生△師走 世二只ハ古式ニ

△古今ノ違ナリ 世二只ハ古式ニ △山降△風嵐 世四只ハ凡例ナリ

指合可有ニ分別事

○迎○而 世二只ハ年余波ノ例ナリ ○社○多○多○り○比○多○多○り

○小と多り○て多り 世四只ハ古式ニ六本夏ト
Pレ氏今式ニ子細ナシ ○三字假名

○五字假名 世二只ハ古式ノ名目ナリ
今式ニ六等ノ細ナシ ○老○親子 世二只
ヲ本

○鳴子○鯛○花鳥繪○花ノ櫻 世二只ハ古式ト今式トニ去嫌ノ透目
ヲ云ヘリ其下ニ考ヘ知キナリ

○楓ノ紅葉 世五品ハ古式ト今式トニ去嫌ノ透目
ヲ云ヘリ其下ニ考ヘ知キナリ

千句^ニ有^ル一物^ノ之^事

●鬼●虎●龍●女 世四只ハ連能ノ差別ナリ新式ノ
一座一旬ト云フ所ニ凡五十余名

アレ氏多ハ連能ノ用ニシテ能譜ニ不用ナリ去レ氏世四只ハ
佛軍ニ敵シテ能ト誰トノ差別ヲ云ヘリ今式ニ異能ノ数ヲ定ス

花鳥^ニ有^ル二物^ノ之^事

柳櫻厚^ニ風^ニ管^ハ八^ノ象^ハ千^ノ鳥 世七只ハ古式ナリ一座
一旬ノ物ナレ氏花鳥ノ二只

ハ四花ハ甘ノ賞取ニ效ヒテ一座三旬
マ有手ナリ花鳥ノ名ハ代々ニ考ヘシ冬牡丹外椿外梅

紅梅^ニ桃^ニ梅^ニ櫻^ニ紅^ニ葉^ニ山^ニ吹^ニ郭^ニ云 世八只ハ古式ナリ
中ニモ只一旬ナリ

二旬ハ有ニキ物ノ凡例ナリ世段ノ詮用ニ旬有手異能ハ
只三旬ニ旬有ニキ同能ニト成セルニ旬一意ノ用ヲ知キナリ

日用^ニ可^ル輕^ク物^ノ之^事

○昔曉○庭垣○袖襟○湯汁○文仗 世十只ハ天象
地形ヨリ器賦

○食服等ノ凡例ナリ 世類ハ
總テ能ノ輕重ヲ知レシ ○淫笑○照屋○植所

○眠覺○起居 世十品ハ能心字ノ凡例ニシテ
面ヲ目テハ七モ八モ有ヘシ ○月白

○耳口○手足 世六品ハ支能ノ能ナレト平話
用多ケレハ折ヲ替テ四年モ有ヘシ

不可不審^ス於^ニ之^事

老福神親子此之品ハ不審ノ理屈ナリ早意編^事

電光^鳥鳥^雀橋ハ古式ヲ捨テ今式ヲ取レトナリ龍^臣電此五品モ前ノ例ナリ古式ハ嫌^ハ又物ヲ今式ニ嫌^ハル

控^ノ不^審上^ハ青^柳花^虫櫻^人此之品ハ式同ノ相遠ヲ各テ去嫌^ハ二例タラ

洞^露洞^雨書^机櫻^鳥此四品モ相遠ナリ用所ハ其下ニ考レ都^鳥

冷^字此ニ平ハ字又ノ婚ト字又ノ向遠ナリ此ニ口ヲ以テ連佛ノ用無用トテ損益トヲ知^キナリ

曾^テ不^ル及^バ論^ニ物^ノ之^事

雲^散椿^花蓮^入度此ニ平ハ佛^ノ筆ヲ難シ今式ニハ不用ヲ云^ヘリ

朽^木釈^文流^類説^白紙^取成此ニ平ハ古ノ附^テ意^ト

云^一取^域ト云^ル其^比ノ設^{ナリ}今^ノ作^諸ノ不^用
ナカラ^也等^ニ古^式ト今^式トノ各^別ヲ知^レトナリ

文字穿^毬之^事

影^陰也^成場^庭此六品ハ古^ノ今^ノ常^談ナリ然^レモ

訓^レテ例^ノノ字^ニ寫^ノ滝^ノ詠^ノ齡^ノ此四品ハ十條^ノ一^ノ類^ノノ意

下^見ル^レ早^意ハ和^漢
ノ通^用ヲ知^レメ^シ為^ス

家^ノ秘^傳之^事

夫^レ秘^傳之^事也此之品ハ佛^ノ筆ノ文^法ニ傳^授ノ自^證ヲ難^セレナリ

古今抄卷五

不可不審控之事

老福神親子 此之品ハ不審ノ理屈ナリ早意 稿妻 ハ古式ヲ捨テ今式ヲ取レトナリ

電光石火 鶴橋 龍尾 空電 此五品モ前ノ例ナリ古式ニ嫌ハ又物ヲ今式ニ嫌ヘル

控ノ不審トハ 此等ノ謂ナリ 青柳 芙蓉 櫻人 此之品ハ古式同ノ相違ヲ捨テ去嫌ハ例タラナリ

洞露洞 雨書 杵杵 厚 此四品モ相違ナリ 都鳥 用所ハ其下ニ考シ

冷字 此ニハ字又ノ類ト字又ノ例遠ナリ此ニ口ヲ以テ連作ノ用無用トテテ損益トヲ知キナリ

曾不及論物之事

雨散 椿之花 蓮ノ実 此ニハ佛舎ヲ難トシ今式ニハ不用ヲ云ヘリ

朽木 秋文 此ニハ流類説 白鬼紙 取成 此ニハ古式ノ取成ト云ル其比ノ設ナリ今ノ能讀ノ不用ナカラ此等ニ古式ト今式トノ各別ヲ知レトナリ

文字穿段金之事

影陰 ○ 世成 ○ 場庭 此六品ハ古今ノ常談ナリ然レモ今式ニハ庭ヲハト訓レ場ヲハト訓レテ例ノ一字

一用タルキナリ ○ 鳥 ○ 滝 ○ 詠 ○ 齡 此四品ハ十條一却ノ意地ナリ詮用ハ其文ノ下見ルレ早意ハ和漢ノ通用ヲ知シメシトナリ

家之秘傳之事

秋之秘傳之事 此之品ハ佛舎ノ文法ニ傳授ノ自護ヲ難セシナリ

知識ヲ飾ントスル自讃ノ古ハ笑ニナリ然レニ段ノ詮用
ハ文字言言語ノ用ニ非ス混同ニ中古ノ誹語ニ敵トシ
此十條ノ意地ヲ立ルニ言ハカ當ノ秘訓ト云イ一カ
兩斷ノ法語ト云ル文ノ虚実ヲ看破スル

古今抄序目終

拾遺十箇條

月之口

一理万通序

東花坊

今ノ不拾遺十箇條々自字の末比よりえ縁
の矣商ヤ々に湖南ノ字々ふられ武以ノ縁
下故翁の夜話と紳よきりしてかく十條の
極目と心きりに故翁を世よりゆりよれ
獅子庵の遺稿よそより五秘の一帖よそ
きり也よそよそよそよそよそよそよそ
貞性の佛筆もよそよそよそよそよそよそ

此等三連能ノ用上返寫都寫朝聞此四子毛刑
 無用トヲ知之返入都寫朝聞此四子毛刑
 傳筆三新式ヲ采信文ヲ毀文ヲ平竟公自己傳授ヲ曠
 此右凡ノ抄者筆法ナリ世故三今能諧六ノ毀三手多
 置凡例ノ歴実○稱自身○不汗身○喫子身
 此之身ノ歌道傳授復三他道亦同不用ト上
 傳筆ノ文法三之身ヲ稱成ト亦或亦或淺ノ自己
 知識ヲ飾トスル自證ノ右凡ヲ采元ナリ世三段論用
 文字言語ノ用三非入假同三中古ノ排飾三敵之三
 此十條ノ意地ヲ之三三口力者由ノ秘訓ト云一一刀
 兩斷ノ法部ト云凡文ノ歴実ヲ看破ス之

古今新序目終

拾遺十箇條

月三心

一理万通序

東老坊

今予拾遺十箇條之自享味此之文祿
 の癸酉十二月に湖南の公に予不武の思
 了故翁の夜話と神と云ふ一十條の
 樞目と云ふに故翁と一世の中を在り
 狐子庵の遺稿と云ふ五秘の帖と云
 老也。と云ふに予は此の世に在り
 反性の傳筆も亦予應守の新式と

拾遺十箇條

○ 正法可有取捨事

申右ノ謙譲の法と連音に於て物ハ能く
 二ノ一ニ於て物ハ能く二ノ一ニ於て物ハ能く
 三ノ一ニ於て物ハ能く三ノ一ニ於て物ハ能く
 四ノ一ニ於て物ハ能く四ノ一ニ於て物ハ能く
 五ノ一ニ於て物ハ能く五ノ一ニ於て物ハ能く
 六ノ一ニ於て物ハ能く六ノ一ニ於て物ハ能く
 七ノ一ニ於て物ハ能く七ノ一ニ於て物ハ能く
 八ノ一ニ於て物ハ能く八ノ一ニ於て物ハ能く
 九ノ一ニ於て物ハ能く九ノ一ニ於て物ハ能く
 十ノ一ニ於て物ハ能く十ノ一ニ於て物ハ能く

中左の謙語と云ふ時と連音の式同
 以て一何失失と他國の強^強なるを
 志するに由^由なるに^に行^行ふもの
 ありて^て減^減の^の探^探察^察と^とし^して^てか^かく
 遺^遺稿^稿の^の一^一部^部を^を一^一か^かく^く論^論
 外^外語^語と^とし^して^て一^一部^部を^を一^一か^かく^く論^論
 了^了物^物と^とし^して^て一^一部^部を^を一^一か^かく^く論^論
 耳^耳と^とし^して^て一^一部^部を^を一^一か^かく^く論^論
 達^達の^の地^地と^とし^して^て一^一部^部を^を一^一か^かく^く論^論
 寶永^{寶永} 卯^卯之^之月^月

拾遺十箇條

○ 在法可有取捨事

中左の謙語の式と連音の式を物に從
 二と云ふもの地と云ふもの地と云ふ
 地と云ふもの地と云ふもの地と云ふ
 面と云ふもの地と云ふもの地と云ふ
 地と云ふもの地と云ふもの地と云ふ
 地と云ふもの地と云ふもの地と云ふ
 地と云ふもの地と云ふもの地と云ふ

あれい子午階のなまをいふまゝにいふ
てし我とさる一し去るハ連音と能階は何す
の式より方々せし何ものはうおるをうあん能階
と能階の遠目とさる也我とさる中七の能階より
各教の増減する事と和訓のほくききと杜熊
とらひ訓自語の牡丹とぬうと物とよおるハ連音
ハ和訓の二あれと能階と音訓の二とさるはるを

和漢のきういふく音訓とさる名せおる一此の
百約におる物名の二もさる今此能階の世はより
論をいふ字の嫡此不核特と子一しはとさる今此
能階といふ古の各目とさるくをきといふ牡丹の
を物も或を踏皮のわんとといふ或をわく餅とよ
時を折とさるり面と折りや又るしるしをてこれ
と踏皮の牡丹とさるくといふ此のわぬりといひ
餅の牡丹とあうくといふ越の膝くといふ能階
ハ例の治ちよりかして牡丹の牡丹とあうてさる
とさるといふ此とに古今の差子とさるらる也

器賤食服も目もきくら耳もひく抱らん情
 したをえある一なれいきとひ人の制をいさし
 我と用投とある一ま也指合とら倍法の拍子
 あれい子余波のつさありてありん能階
 てし我とある一し去るへ連音と能階はあり
 の式よりるせし何ゆのはらおるあるん能階
 と能階の遠近自とる也我とく中七の能階より
 各教の増減とる事と和訓のほくまきと杜能
 とらひ音語の牡丹とぬる物とふおるへ連音
 和訓の一あれも能階と音訓の二とるはるを

和漢のきういあう音訓と名せおる一此の
 百約におる物名の二も今能階の世はより
 論をい字文の媚此不様特と子一しとて今能
 能階とい古代の名目ととむくをきうい牡丹の
 在物も或は踏皮のわんとつひ或はわく餅とふ
 時を折ととる而を切りて又るしとるしとを
 と踏皮の牡丹ととるくと後十姓のわぬととい
 餅の牡丹とあうくとおと越の膝くととる能階
 例の違ふよりかして桂木の牡丹とあつてとと
 又名と異姓とに古今の差子ととるんも也

柳只一▲櫻只一▲一て喜柳とい逢櫻とい
い或と秋冬の詞とむまひて之ある一と定
られと誰借よる柳借とい櫻借とい例
の四一ゆり一それとまひま柳し逢櫻七二名
一辨の物あれい今此誰借よる只一といむ柳等と
とい柳固といよる是辨と例の教とらむまて

▲量只一四式とかくのこく一産ると定られ一と
誰借と例の青訓も及ぶと量くと定ある一
とら何れよ量此二るあるや林量い一てある
と一り中ちらけれぬ多あれ一色くよと
一とあり一即下通の時ふんまを掌の初ありと
中何よりならを老ありとある一かこれいれい
と一とわしに量くと定るとある一と一と
と一秋よりあると一とあると一と一と
六果と凡例として古今のたふとまらしむる也

けりとの中右の能事よひの火と掃ふらふの能事
 して神代は代なと字のさうぢかかると染草の
 ちうひより千式とひの万はといひ用ゝ不此ふあれい
 捨る不もふあんおとや古代は取捨といふと
 四式よと▲柳只二▲櫻只二して喜柳といひ逢櫻と
 いひ或は秋冬の詞とむさひてとある一と空
 られと能事よ柳掃といひ掃鯛といひ替て例
 の中より一とれとさうひを柳と逢櫻と二名
 一辨の物あれい今此能事よ只一といふむ柳笑と
 つい柳固といふ是辨と例の教をばくとて見ゆて

各熱も食服し皆くこゝに例をまて▲雪只二
 ▲雪只二四式とかくのこく一産ると空しれ一と
 能事と例の青訓も及つと雪くとるある一
 とは何れよ雪此とるあるやお雪と一とるあり
 とその中右にけれぬ教多あれい一色くよ雪
 一とある一即下通の時ふん雪と雪の初ありと
 中右よりなると老ありとある一かこれいとも
 とこかこに雪とくといふとあんなうとくといふ雪
 とは秋とあるとて雪くとるある一と今をけ
 六果と凡例として古今のたふとまらしむる也

▲杜若 ▲芭蕉 ありて古はよけれと一ありて時々の音訓
の二とありて或は裁入のごととふされと二ありて今も此
各目とお月むねふ用とありて今も此の二ありて
りて▲鶴鳴とありて今も音訓とありて今も此の二ありて
る一狂選とありて和歌連歌と裁入とありて
し句と作ればあれとて今も此の二ありて今も此の二ありて
ふももびとありて能活とて今も此の二ありて今も此の二ありて
とありて今も此の二ありて今も此の二ありて今も此の二ありて
とありて今も此の二ありて今も此の二ありて今も此の二ありて
とありて今も此の二ありて今も此の二ありて今も此の二ありて
とありて今も此の二ありて今も此の二ありて今も此の二ありて

はのふよ同とふ名の象ある物とて今も此の二ありて今も此の二ありて
さうい様とて今も此の二ありて今も此の二ありて今も此の二ありて
一ありて今も此の二ありて今も此の二ありて今も此の二ありて
とありて今も此の二ありて今も此の二ありて今も此の二ありて
各目の教量とて今も此の二ありて今も此の二ありて今も此の二ありて
いして謂ふれい百所千名とて今も此の二ありて今も此の二ありて

○去嫌可有断敵事

むし此能活と今も此能活と打越の論のめありて
染指の二此とありて今も此能活と今も此能活と今も此能活と

うきまゝにふあつて凡てとりかへりて
 ころり約とる白あつて人倫あつて
 中より人倫とてりまて定むる起居見守の詞
 とはげて人の心倫とあはれむあれぬ△父母とい
 △男女といひ目まをら耳まをらるるあまのあつて或を
 自他のさういふころり或は法持のまゝと考へ
 打越の附んとあつて人倫の心倫を無がよと
 一かゝのころりを奪ひあつてはまゝに古おし
 △い△誰△身△独△媒といふおとまて人倫の心
 人倫とて定むるころりは此制の寛格と

おまゝに一かゝりや古式の寛かゝるおの△誰何とい
 打越一人倫と嫌ふとて例のよ子とてあ△僧は
 人倫にあつてとて例のよ子とてあ△僧は
 法をとりて式とてあおと介ふとてあ△僧の打越
 一人倫といふ△寺の打越一人倫といふ△親王△皇女
 △親王△皇女のこととて△天皇とて△天女とい
 ても何の部といふはあつて△帝も人倫といふ
 去て△佛門を居るはあつて△仙洞
 △新院のれと人倫といふはあつて△佛と△鬼は
 ありて式も部れと定むるはあつて△佛と△鬼は

の指合とてさうとてけ例と勘方の境極とらふ
る一してや右式の嫌ひぬれと△冠とある一と
はげ△綿と本棉とはげ△又さしせしと嫌ひぬ
り△ぬとさしと△響に持しと論されり二百
一とあれとてけぬとさるる一附句と嫌ひぬれ
り今の能活と今とて可用の何れあれとてさ
けぬおとあり可用の凡例とある一とせを余へ
皆く挙るに及びとせられと大む一の何れと
△活とつひ△所走とつひぬれとさるるの何れと
附一打越と嫌ひぬれと今一の控と稱と一

但を証しとさしと月とて附とてやぬとて知合
右今の新敵とて連字と二とあるとて一能活と
一と一とつひ連字と一と一と割と一と一能活と
と二ととつひと能活とさしと用の何れと一と
の人知とあつと一折物と一馬の打越とぬれとさ
半ありとてさしとの時をよやとてぬれと一と
連能の用とて用とさしと彼とてさしと用ぬれ
とてとてさしとけ用ありとてさしと変通自在と
とやさるるよと字とつひとさしとて△山依とさ
とさしと△所走と新敵と嫌ひぬれと一と一と

又千と子とを併して百代のいおとせしむとされ
 二代の家漢とかくのこゝへ二世の家漢と家漢不
 しく百世の如きとちる(まらむ)事意は「合し
 去嫌し今の能階と論より時よりのはたの能し
 非ありし言は却よ公界とと「ゆり」能したの猶の
 とかよわく「し」本波のあふん「界」也とちる
 「能階」を「し」て「し」時「二」代「の」作はし
 ちよ「ま」毛

○指合可有分別事

流傘と一能くし可言おと能と能とれ「中」

可言おと「能」の「し」と指合「子」と「し」を「れ」流傘
 一「能」の「子」とあけて「の」は「し」指合ありと
 されし「し」も「し」例の故とあると「し」偏不「味
 と「し」も「し」義と和漢の訓美と論を「能」字
 一「子」二言あれ「字」中の詞「し」て「の」字に
 指合「し」而「し」為「而」の訓畧あれ「子」二言
 「し」指合ある「今」も「し」可言の「能」の「し」ある
 花と「ん」も「し」此中の字と語を「花」と「ん」も
 「し」畧あり「與」而「の」子「し」も「し」も「し」も
 而「し」て「の」訓を「し」為「斯」而「の」畧あれ「物」

とをとり花お葉の二ふと○様と花の面をけり
て軽く○相とお葉を折と嬌してちか何と
二ふの差ふあるやむとと葉の艶とつひお葉
いふ秋の色とつひて様と相とと折やむと
お葉をて用やむとむら様とあむと様
よあつたらむとむらと秋のふも論ち
とやま論と様と相とむとお葉と二面
らりて只二ある一まよや異解と例に教と
さむとむとらねと様の二まよとむらとむら
後の二葉との論とるる一今選とらるに

の二條と指人を何のああるや去嫌と何のあ
や一ふたのわのあむととむらと例の似式と折
とく例のちあむとむらと一かくのむとく
のむとむとむらとむらとむらとむらとむらと

○千句有_二一物之_一事

おも連派の在式より●鬼●虎●龍●女とふれ
八千句と只一ふれ八百約とむらとむらとむらと
のむらとむらとむらとむらとむらとむらと
へ能活の字お常説とむらとむらとむらと

子らりて其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に

其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に
其の詞を以て連音の體に

いづれの能潜る郡詞とめらむ誹者のたて集
の伊と交するところへ一海や公任種信信のとき
和漢通達の音の違ふも能潜の辨れありあつひ
いづれこのさひきりくやとあや一はるるも
我十條の返をそくもおそろひまゝか建内
のさ地ははのれい和歌をうらひ連音とす其
此能潜とあはさるるはゆれし比不孤起起とす
大道の理よりしはの故さときりれを武の
新まさとまんとされはそを是とらんこれを
非といふもいふを能く人の人を彼より我

とあはさるるも我ら彼とましくし我らに等
爰も春秋の釘語ケウゴとおりの我とまらぬのしけ
十條より我と罪とらぬものしけ十條ありん
福ふあはらぬ種の種よとされぬおのま前
い言とこいひて一きり再選の功とまらんとき
一世の議とまを今れ十條より一たの海と
まをいけ一はあり

○花鳥有_二物_一之_事

旧式と竹木も然のれいお月むね只一りて音訓

よかりりて各々よふしてをてありてあれと
今の能諧の次は下ら論をい音しと訓もかろ
ましてと名とと中々にあつて二あるは
花もある一とさしに柳櫻のときもまを
柳のつらやうにさる秋と一葉のおらうへたる
むのそも落しおらうとさうと様をまられた
冬とあつてはれらとと中々にも此二を誤と
いふもさやうに同じと誤のこもさうとまら
常とともさるおらうと訓のさしとらとまら
らと此葉とと名とと十月の名おとあ

まらんとあつてはととさしと名とと
ひまゝとと二葉のおおらんと今とと
つらとまらとと名ととあつて一物二用の凡例と
あつてはとと名ととあつて一物二用の凡例と
まらんとはとと名ととあつて一物二用の凡例と
おはしれとと名ととあつて一物二用の凡例と
おはしれとと名ととあつて一物二用の凡例と
二あるとと名ととあつて一物二用の凡例と
まらんとはとと名ととあつて一物二用の凡例と

と二流は二あり一と云ふは今此書とおあり
てまをましてみ極といひ細桃といひ極極のおま
とふとも決りて二をあり一とても余の竹木も
け削らるるまをまらけ式の流まらふへ柳を
らよれともちるまをまらけ式のおまを
かす時とらるるおまや掌の盛衰より厚も
無もまをまてまをまらけ式のおまを
凡雅を削のまをまらけ式のおまを
とをまらけ式のおまをまらけ式のおまを
あれ二流は二とてまをまらけ式のおまを

ある一流は二あり一と云ふは今此書とおあり
てまをましてみ極といひ細桃といひ極極のおま
とふとも決りて二をあり一とても余の竹木も
け削らるるまをまらけ式の流まらふへ柳を
らよれともちるまをまらけ式のおまを
かす時とらるるおまや掌の盛衰より厚も
無もまをまてまをまらけ式のおまを
凡雅を削のまをまらけ式のおまを
とをまらけ式のおまをまらけ式のおまを
あれ二流は二とてまをまらけ式のおまを

論といはし一匹を今く新制表は古法に似たりと記
と破れともてはと破くさる古今の制語と之
つせさよりけ例のむさるとえくひて一匹の夏袴
はふよ及びや一匹の夏袴と定規ふく百世此
の夏とはくまをかくのこくかくせしきとて
あまの越とある也

○日用可^キ物^{ニス}事

右柄よる○音○曉のおより○座○垣○袖○襟の
こまへ○湯のけのしりふ字おとあまを二三

あれとも昔を古今の字例とてくも曉をの
暮の字例とあらふ一例よふとされ二と通の時
あまむあやゆ幸よる○文も○はも訓美とて此
おむつう一けれときく折と命とてひ勢と
ひもある一むしを連能の或同と態^{ワカ}字よし
字もくばなあれと○注とひ○笑とひ○照雲
○植前の子とて○霽外と○起居も多用ある
中よも○目鼻○耳口のこまへ後て○ふの子も
○足のうすも口おく北平語あれは異流の例の
あつよ及びとてま字とて居よる口と字むし

おぼろげ態藝の字あふり、塵押復用の軽と詞
いさしとひ古式、一と一とあし折と替てと句と
さむとく、この方の詞字に面とあて、八と空、一
七句とひみり、とひみり、の字、まを論、及
まして折とひ表とあし、とる、とる、よ、ゆ、と
も、ま、今、選、ま、ら、に、け、後、を、あ、て、漏、ま、ら、よ、ん、及
わ、と、世、界、の、あ、し、ゆ、の、詞、字、の、軽、さ、と、我、と、ま、る
一、は、れ、の、あ、ま、ら、折、と、あ、て、一、字、と、ま、ち、軽、さ、と、面
と、ま、ら、て、八、と、空、あ、六、千、文、の、字、の、感、お、く、た、れ、
の、字、類、と、凡、例、と、あ、て、必、ず、一、固、と、ま、ま、と

も、耐、も、お、れ、此、変、と、あ、ん、と、也
○ 不可不審^キ控^ス之^キ事

おぼろげ申古の式目と論まら、一、才、一、連、詠、の
用、と、る、用、と、ま、ま、と、わ、く、と、連、系、の、豔、詞、の
あ、と、と、ま、ま、の、中、に、と、ま、ま、の、理、房、と、ま、ま、と、
滑、筋、の、諷、笑、の、和、と、ま、ま、と、ま、ら、よ、り、今、の、能、流、の
詠、と、ま、ま、の、危、の、ら、ひ、あ、る、ゆ、せ、お、れ、中、より
不、審、と、ま、ま、の、法、を、を、と、述、懐、と、ま、ま、と、表、八、句
と、嫌、へ、し、ぬ、の、非、を、嫌、り、と、ま、ま、と、ま、ら、よ、り、を、彼、に

何處あつたといふ字ともいふ述懐とあり親子
にほきくを述懐あるよりこれくを所ぬ
殆どぬ一或は福壽電光と天象は嫌うとい
ひ鳥鵲の橋と生れあつたといふ我と生れ
嫌うといふ民の電と生れあつたといふ
例の不用をやねるやけおらと命を推量
しうとて船をいふとまゝにうへるといふ
不審の事しよ用いよや他々今式の人を
いふやおれの中より借馬糸のほけを秋能滑の
り用あつた論まゝ不審はくなくといふ

いふ事しよ御況よとまゝに一柱おあつたや
其況よと秋よあつたといふあつたといふ
櫻人況よとまゝの事と柱を柱およと
人倫よとまゝの事と一柱おあつたといふ
ちふある時をまゝといふとあつたといふ道
よ一貫の日あつたといふとあつたといふ
洞の雨を浮おあつたといふとあつたといふ
不審あつたといふのねらり調をさして我家
の用あつたといふとあつたといふとあつた
よとあつたといふとあつたといふとあつた

あんまの字とさるるを秋北の字とあるを根が
 下おまの所らるるをやまらるるをの根の下と云れ
 りの根をさるるをいひてま根とおまといふ
 なるはまのめらるるありてこれと不審の
 不審
 といひて但をとおと看破して不埒不ぬの認
 とやいふ或と根とを雜とすれと標するを
 勿論とて言はれしにまづもま実と云ふあり
 名あんと論あふ秋字といふ一或は成傘
 記の日は論を世言おま冬と云ふはと記巴
 下向して奥候と云ふなりとをの所と云ふ弟子

一難破といふ記の如くは字と連なりし面を
 まゝの飛階と折と婦とや何故よけ一字の
 連なりしとてく厳守あるやされと飛階は
 平話とこれとの名れと云ひしとねい冬と雜
 う北論とし及びして替しては既の畢竟は不審
 へ不審の候よりして左おの控よりと云ふもや
 但を老人述懐とあるを標するを秋字ありと
 左おの控と云ふくまや一社の家録と一世北
 家議といはれ用の用と云ふも色返と云ふは未の
 子と儒佛神の之家より今の公儀のけなを

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines within a rectangular border. The characters are dense and connected, typical of a shorthand system.

Handwritten text in a cursive script, similar to the top page. It consists of about 10 horizontal lines of dense, connected characters within a rectangular border.

とてし猫のね子のついでに控へてそれと能借と
各片けあうべしと連音の公式はなうしと
あひまの人の東詞はとて馬は鼠とてついで
うとて今能借の言行の可く用のはたのこ
お月さんおれの中よりと例といふは▲考ふ靈の
附句と嬌うととておとあけ万葉といひ
れこれと今と附くとも所なるとこれの論
しと及ぶぬせ或を▲様と新ありむとむとこい
つとまきありきとひ花のうらあくととも花の
あつと辨ありしとまきあるとつとつと何あふ

け様のこかく念の入るや或を▲重かたはつとせ
萬字と花とつとつとつととつと
あつて業持とつとつとつと
控物とつとつとつとつとつとつとつとつと
の海秋と念の入るつとつとつとつとつとつと
能借とつとつとつとつとつとつとつとつと
とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
い千州とつとつとつとつとつとつとつとつと
松とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
のちあつとつとつとつとつとつとつとつとつと

のちありは花の字よりなりけり所ありはむとあり
まきありとありおと今もの似しむぬははあれ
例のむくよありねとも今此式目の可_レ用あれ
せまくれは論の一條と_レ字のほくと_レ字は
とむしは_レ詠諧と今此詠諧とおありするは
あつた_レの中_レといは_レ一條より_レ他_レの_レも

○文字穿鑿之書

字より_レ他_レの_レ字より_レ色く_レの_レ名_レありて_レ文字
穿鑿の事あれは_レ月の_レお_レら_レら_レ花の_レお_レら

く_レも_レる_レと_レま_レげ_レの_レ向_レより_レ及_レ字_レは_レ一_レつ_レ○_レ也_レあり
○_レ成_レあり_レと_レと_レる_レく_レの_レあ_レれ_レ未_レ練_レの_レ机_レ字
と_レ支_レ配_レする_レ時_レ指_レと_レり_レと_レり_レか_レん_レより_レ各_レ同
い_レは_レは_レら_レり_レと_レと_レる_レに_レれ_レと_レ机_レ字_レの_レき_レと_レあ_レむ
し_レも_レと_レせ_レられ_レとも_レ○_レ場_レより_レ○_レ庭_レより_レ此_レは_レは_レと
し_レ今_レより_レを_レ駢_レと_レり_レの_レ用_レの_レは_レは_レあ_レれ_レ我_レの_レ
大_レ和_レ詞_レより_レ真_レ名_レより_レき_レと_レ一_レ字_レ一_レ用_レと_レ定_レて_レ中_レ文
一_レ字_レも_レ中_レと_レされ_レぬ_レと_レ西_レと_レり_レ中_レより_レ庭_レ場_レの
差_レあ_レれ_レの_レあ_レれ_レと_レ子_レ一_レ用_レの_レ和_レ訓_レと_レ終_レれ_レと
我_レの_レ書_レは_レら_レ庭_レ字_レと_レあ_レれ_レと_レ訓_レと_レく_レ場_レ字_レの

ざし訓と一きまひなま文の識伴達とて叱
 ちうりもむりや動りもささこち美ありとて
 我々の馬もさかへもあやまりも致ふいなるせ
 物して今のはらもくあらち和の平話も同雅を
 正鵠と及ふさんけなふけ修を雲海も城も
 陣とさうりて馬も一後ひもささきさよとせ
 古抄と新古老と敵と中竟も今龍階
 耳字文の害らんとさなせはらや金筆
 鳩の下よ。鳩をさしたるせあゆの馬と字も

ぶせけんしんらーつぎとつひてふちの馬と
 ぶまるとあ一人とまこつとをけあせぬ
 中少の馬と大馬とをけあせぬ
 のあふ池水のこく湖水のさぬらーと形容
 ありと山崎を伝のドとれーつらやおぬゆま
 各蹊シヤフつれ或と○流字のさ牙撃と流のま
 り字の誤あり曝布のさ子とち一とと例の
 子痛もあり但や曝字を老人の誤も瀑を
 飛泉懸心水とあり付て子と曝布サラスと訓て
 流と伝くる人の形容より流のさうと美訓

あんに大和にけられとりのむしとてしるくし片假名
 と付しとやうなむしと誦とあつてむしとてのむし一牧
 と埒のあつて馬と馬と訓らるゝも今この用
 と達とてしるくも儒家の書数のその向とてしるく
 能活と人知のあつてあつてや或と。詠の字に
 新文のしるくしとて目とてしるくは同訓異の字に於て
 ぶたれし或同の例の中とてあつてあつてしるく和歌に
 連字とてしるくの訓も分るゝや詠とてしるくは
 吟詠とてしるく詠言とてしるく詠也とてしるく詠の字に
 古今の字にしるく詠嘆とてしるく詞とてしるく感嘆

しるく物とてしるくあつてあつて佛家のれ誦と
 節とてしるくしるくの詠吟とてしるく誦也とてしるく
 同訓異字とてしるくを同しとてしるく物字と用ひ
 してあつてしるく誦字と用ひしるく詠文と
 流視の字訓ありしるく本家の古訓とてしるく物とてしるく
 詩とてしるく物字とてしるく訓とてしるく也とてしるく物花とてしるく
 詠花とてしるく西並とてしるく三の副假名とてしるく
 詠とてしるく詠文の美とてしるく詠を詠とてしるく詠の略
 りて物とてしるく流視の略ありしるく左右とてしるくおの美
 ありしるく詠とてしるく詠とてしるく我おの和歌とて

一假名と真名とに通をたれぬ家通の字
 ちりひより箸柄といひる^{アヌク}同訓の
 穿鑿をきよふ一とてしめて年論のその中より
 〇^人齡とふ字此穿鑿をたれ傘一部の長文と
 建治應安の両式とて一日を固の字近連と
 筆く^{カスガ}落すとて又辨とての^ニ微細の辨^ア均^カあ
 へ^ニ字論を例の世用
 あり筆^{スナヒ}に^カ又の優游とてふ一^ニ人^ニ率^ニ曰^ク齡
 の^ニそ^レち^ニは^ニそ^レち^ニ等^ニよ^リ年^の字^に但^テ教^の七^十八^十と
 不可^{スト}嫌^ラく^ラこれ新式のお越と嫌ふおのふよ

ありそれ新式に惜字此各近連のおほくあは合
 下^ニ年^のひ^きく^ク穿^鑿を^たれ^ル今^の力^とも^りて
 け^にお^のち^に一^に骨^おと^ちあ^らむ^と也^{あり}と^一派
 一^に感^添と^あり^し付^らされ^し一^に條^を龍^の
 是^はま^はま^とや^らむ^とあ^らむ^との^及ぶ^る一^にや
 文^よ合^はさ^しく^く一^とそ^らら^むと^しふ^と年^の字
 と^二の^もひ^ひと^そと^しつ^とあ^けを^不可^ト嫌^スと
 一^にち^の字^よ年^の又^の字^ある^しと^しら^るく^らる^はく
 年^稔歳^年一^にれ^るの^と一^にせ^しと^しち^のあ^り
 お^のち^に古^人の^誤る^一と^いふ^今を^新式^の

又らの字よりなるま——と云ふ今は各よけ照の用を
 新式の年の字と持ては筆の字をせよと用は
 ありされし新式の年の字と違ひて今も
 とせむと云ふは筆の字をせよと云ふに
 てよむるの指令も申念ありと云ふと能清と
 ハ類類ツラカウと云ひて申用の傍語よりよむればけ
 以下を丸くしと例は古凡の早下自慢也今選
 まるに難各の字を竟をこそあらんと二十年此訓
 異各うて禪師セシと云ひは師と云ふ撥字ハコシと云ふ
 と云ふあれ障子セウジと云ふ菓子と云ひ和訓を

されし俗語ありてま々と大和の神祕として
 せしむる若なる神の女ありと云ふ漢子の自慢は
 傍語と云ふま——と云ふは論の傍まふ不
 法筆の字了十ツシ字ジと云ふは新式めり了十ツシ年
 あれ、整の之十シ年シ四ヨ年シと云ふ字を婦メの字
 あり物の表也七ナ十シ八ヤ十シ年シの字の嫌キなむ
 と新式の訂章と云ふま——と云ふはかめと云ふ
 ことと云ふ例は若の傍記ありと云ふも自こに
 けらと云ふま——と云ふは能清と云ふと云ふま
 能清と云ふと云ふと云ふと云ふの言を言清の

詠美し比喩きし詠美の遊しして世はよ人知の
用あれはくみよき世の能諧をきるるなり

○家々の秘傳の事

むしりし和歌し連歌し家々の秘傳あり
折言緋血刺の所法よおよし中比の能諧しおあはく
和歌し連歌よほしおよし彼と秘しをよゆれと
今此能諧しつりしをたて入るしきりし事詠
とせよのし候よしおあはくの能諧の事あり
とくきぬしあやまきる月と二夜よきりしひて

実の心をぬきおしや山争の不埒と海は其れ
秋されの秋よしをよしに傳の詞しとちあり
きし春あれは秋あれはくわたりし歌を此は連
しちとくわたりしや藝よ歌中の夜をほしむる
美実の美をあらうとぬけ色とつりし事あり
より女の夜を皆く囃とをよしに信しと
子よ能し春あれは秋あれは実よしあり
と中今もよしをよしに秋されし連歌なり
用あれはの夜よしをよしにあらねと文ありし
はりしとくしを能諧の日用ちるより傳語の訓美

いふあくは筆一部の放言にてとも序よつて
花咲の神を重し今を疑ふ（て）式目となれり
物にてとも我は秘すの法を或をぬる或は
あまらう我はきつねし（て）あつり一世のねは
中用とさつらるる言はる所の法とす（て）せ
わくのそとくかくのそとまをさるる為の笑言也
之四者そにげらと家をもよ

おろくろの秘授秘傳とす（て）とも家くの内

うて内秘が現とんけ謂あれんまやめし佛家
 へく秘密不定の二教あれと秘密とんけいんも
 一とんけいんもわのほとあけぬよ秘する二校の
 花とんけいんの二遊業とニツコ歡爾とあまのれん
 一とんけいん此道も骨空と唯アツ乃とんけいんも
 の忠恕の言と通ニチ辭とて發スとんけいん
 せねの所はあしうまや申古のお者達の
 泄儀の式目とえくぬとて歎るの秘事と
 あしうれや秘授とあくの符帳とんけいん
 一とんけいん我が家の泄儀とんけいんも

今とんけいんも二刀兩断の代語とんけいんも
 一部の秘訣とあしうれと波りし軍部の邪とんけいんも
 一とんけいんも説破とんけいんも日まうとんけいんも
 一とんけいんも秘するとんけいんも及つとんけいんも
 然シ識の通の場とんけいんも秘傳くとんけいんも
 一とんけいんも十條を佛秘とあしうれと佛傳は
 あしうれ秘事の生ふよ江東湖南の行人と對する
 りねの事話とあしうれ新故のきうひとあしうれ
 ちうせとあしうれ申古の泄儀の言とんけいんも
 一とんけいんも類とんけいんも面とぬくとんけいんも

是等の口とけをもつてなほのち前よりゆつたは
 まうとあれし我々も能潜も古人あつて
 千系一斬の秘訓ありて百世も天下の古託と
 坐断されし今此十條を考に却のつていふ一
 論もいふ故託の耳とるるに能くははるるに
 天道の恢ニキニふし能潜のるともして儒氏のま子
 此詞よりを拜見し一六藝の媒とをさるるに儒家
 と史記の神とあるとやまされ能潜と能潜と
 い各ふかの家あれは此竹の武目といふすまふ
 あつたし貞享世とつりえ禄のちちまてし

カキ

系家と能く能潜の名とほく入之世又世の門と
 中してし書けおし武目とさるるに今此武路の
 宗匠家ゆりにおしそこ中余おしあつた
 ともく長政老人の法余ともて能潜フシとされ
 能潜も能潜もおしゆはとあるとさるるに
 我々の古老ともは余持のきく此通をいふし
 おしそこもいふなほの遺誠はうらり二十余年
 とるこもを能潜の辭をいふかこくことと
 といふ論とさるる古風の附方よはるる
 とぬるを例の二こよはるるなほの遺誠

